

【追加1】

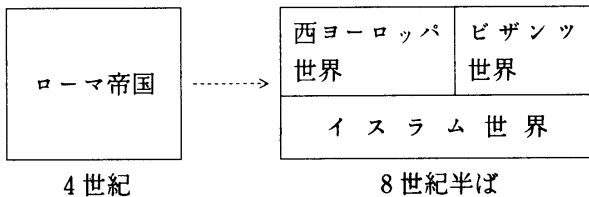
筑波大学

次の問について、400字以内で解答しなさい。なお解答文の中では指定された語句に下線を施すこと。西ローマ帝国滅亡後から8世紀後半までのイタリアの政治情勢について以下の語句を用いて述べなさい(なお以下の語句のうちランゴバルドはロンバルドと表記される場合もある)。ピピン ランゴバルド 東ゴート ユスティニアヌス カール大帝
 ヴァンダル人のローマ占領後、オドアケルが西ローマ帝国を滅亡させてイタリアを支配した。5世紀末にテオドリック率いる東ゴート族がイタリアに侵入して、東ゴート王国を建てた。東ゴート王国が支配する時代にイタリアは一時安定を享受したが、間もなく東ローマ皇帝ユスティニアヌスの遠征を受け、東ゴート王国は6世紀半ばに滅亡した。東ローマ帝国のイタリア支配も長くは続かず、ユスティニアヌスの死後にゲルマン人の一派ランゴバルド人が北イタリアに侵入した。東ローマ帝国の北イタリア領を奪って、ランゴバルド王国を建設した。8世紀半ばになると、ランゴバルド王国(アリウス派)に脅かされた教皇の要請を受け、フランク王国がイタリアに介入した。ピピンはイタリア遠征を行い、その領土の一部を奪い、ラヴェンナ地方を教皇に寄進した。最終的にカール大帝が8世紀後半ランゴバルド王国を滅ぼし、イタリアの大部分をフランク王国に併合した。

【追加2】

首都大学東京

ローマ帝国によって統一された古代地中海世界は、4世紀以降崩壊し、次の図のように新たな三つの世界に分かれていった。この新たに形成された諸世界のうち、「西ヨーロッパ世界」ではゲルマン人諸国家を統一したフランク王国を中心に、紀元600年から800年にかけて新たな文明(中世ヨーロッパ)の原型が形作られたと言われる。この新たな西ヨーロッパ世界の形成においてカール大帝(シャルルマーニュ)が果たした歴史的役割について、以下の語句をすべて使用して、400字以内で述べよ。また、使用した語句には下線を引くこと。



〔語句〕 小ピピン カール＝マルテル レオ3世
 ザクセン(サクソン)族 ウマイヤ朝 アーヘン
 ローマ皇帝権 ビザンツ皇帝

フランク王国の宮宰カール＝マルテルは、トゥール・ポワティエ間の戦いでウマイヤ朝の遠征軍を破り、キリスト教世界を守った。カロリング朝を創始した小ピピンはラヴェンナ地方を寄進することによってローマ教皇との結びつきを強めた。これを受け継いだカール大帝は、北イタリアのランゴバルドや東方のアヴァール族、北方のザクセン族を討って領土を拡大し、イベリア半島にも遠征を行った。また、アーヘンに宮廷学校を開き、アルクインを招くなどカロリング＝ルネサンスを進めた。一方ビザンツ皇帝レオン3世が726年に出した聖像禁止令により対立が決定的となったローマ教会は新たな後ろ盾を求め、ローマ教皇レオ3世により800年カール大帝に西ローマ皇帝の冠が授けられた。これによりローマ教会はビザンツ皇帝からの自立を果たし、ローマ皇帝権をフランク王国が得たことにより、古代ローマ・ゲルマン・キリスト教の三者が融合した西ヨーロッパ世界が成立した。

【追加3】

一橋大

オドアケル王国成立以後、8世紀半ばに至るまで、旧ローマ帝国領だった地中海地域には民族の移動を含む大きな政治的変化が生じた。次の三つの人名を使用し400字で説明せよ。

ユスティニアヌス帝 ムハンマド カール＝マルテル

西ローマ帝国滅亡時の5世紀には、イベリア半島は西ゴート王国に支配され、北アフリカにはヴァンダル王国が建国され、イタリア半島ではオドアケルを倒した東ゴート王国が隆盛期を迎えていた。6世紀半ばユスティニアヌス帝はヴァンダル王国と東ゴート王国と西ゴート王国の一部を奪い、旧ローマ帝国領の大部分を再統一した。帝の死後、ランゴバルドが北イタリアに侵入し、王国を建国した。7世紀初頭にはムハンマドがイスラーム教を創始し、アラブ人を統合した。7世紀半ば、正統カ

リフ時代(ウマル)にはビザンツ帝国からエジプト・シリアを奪い、7世紀末には(ウマイヤ朝期)北アフリカを支配した。8世紀初頭には西ゴート王国を滅ぼしイベリア半島を支配した。東方ではカール=マルテル(トゥール・ポワティエの戦い)と西方ではレオン 3 世に食い止められた。地中海世界はイスラーム圏、ビザンツ帝国(東欧)、フランク王国(西欧)の3文化圏が成立した。

【追加4】

大阪大学

現在、ヨーロッパと呼ばれている地域の周辺部で展開した歴史について、以下の問いに答えなさい。

9~10世紀以降ローマ=カトリック圏に侵入したノルマン人やマジヤール人は、10世紀後半以降ローマ=カトリックを受け入れ、その重要な構成員となった。これによりローマ=カトリック圏は拡大した。以上の過程について、彼らによる国家形成にも触れながら説明しなさい。なお、次の語句を必ず用い、それらの語句には全て傍線を引くこと(250字程度)。

ハンガリー

ノルマンディー

スカンディナヴィア

イングランド

スカンディナヴィア半島周辺を居住地とするノルマン人は、デンマーク・ノルウェー・スウェーデンなどの王国を建国する一方、ヨーロッパ各地に海上遠征を繰り返した。その一派のロロは北フランスにノルマンディー公国を建て、カトリックに改宗した。その後ノルマンディー公ウィリアムがイングランドにノルマン朝を、ルジューロ 2 世が南イタリアに両シチリア王国を建国した。一方、東方からはウラル系のマジヤール人が侵入し、オットー 1 世に西進を阻止されハンガリーに定住し王国を建て、カトリックに改宗した。

【追加5】

京都府立大学

中世初期のノルマン人の活動とその影響について論述せよ。なお、論述するにあたっては、下の語句をすべて使用し、使用した箇所には下線を引いておくこと。

カヌート

シチリア

封建制度

ルーシ

ロロ

航海技術を持ち、商業や海賊行為を行ったノルマン人(ヴァイキング)はヨーロッパ各地に進出し建国した。911年ロロは北フランスにノルマンディー公国を、ルーリックの率いる一派ルーシ 9世紀にロシアにノヴゴロド国を、ついでキエフ公国を建てた。地中海に進出した一派は12世紀にはシチリア島をイスラーム勢力から奪い、南イタリアとあわせて両シチリア王国を建てた。またノルマンの一派デーン人はアングロ=サクソン王国のイングランドに侵入したが、9世紀末のアルフレッド大王はこれを撃退した。しかし、1016年にはカヌートがイングランドを一時征服した。西ヨーロッパではイスラーム勢力の侵入に加え、フランク王国が分裂したところからこのノルマン人やマジヤール人の侵入を受けた。こうした外敵の侵入から守るために、封土を媒介として軍役義務を課す主従関係が成立した。この主従関係を封建制度という。

【追加6】

筑波大学

次の問について、400字以内で解答しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

現代のドイツ領土は、かつての神聖ローマ帝国を基盤としている。神聖ローマ帝国の名称の由来、その15世紀末までの変遷について、以下の語句を用いて説明しなさい。

オットー1世

金印勅書

皇帝による統一

領邦

イタリア政策

ローマ帝国の復興をめざした東フランク[ドイツ]王のオットー1世は、北イタリアに出兵して教皇を援助し、962年に教皇から帝冠を授けられた。ドイツ王が皇帝の称号を受け継ぐことになったことが、神聖ローマ帝国の起源である。その後の皇帝はイタリア政策に力をそそいで、本国の統治をおろそかにしたため、諸侯の自立の傾向が強く、皇帝による統一が達成されなかった。13世紀には皇帝不在の大空位時代もあり、カール4世の時代の1356年に金印勅書が出されて、聖俗の7諸侯が選帝侯として皇帝を選出することが定められた。15世紀半ばからはハプスブルク家から皇帝が選出されたが、混乱は收拾されず、諸侯や都市など、300あまりの領邦が分立した。

【追加7】

一橋大

ヨーロッパ諸国のなかでマジヤール族の脅威をもっとも深刻に蒙ったのは東フランク王国であったが、919年ザクセン族出身の貴族として王位についたハインリヒ1世と子オットー1世はいくつ

かの重要な戦いに勝利し、この外敵の侵入終わらせることによって王としての不動の地位を固めたのみならず、キリスト教世界の防衛者としての西欧世界全体における最高位につくに至った。その経過を具体的に記せ。(200字)

ハインリヒ1世はドイツ諸侯の協力を得て10世紀前半にマジャール人を撃退し、ザクセン朝の基礎を固めた。ザクセン朝を世襲したオットー1世は、側近聖職者を大司教・司教・修道院長に任命する帝国教会政策で王権を強化し、955年にレヒフェルトの戦いでマジャール人を完全に撃退した。つづいて、教皇ヨハネス12世の要請でイタリアに遠征し、962年帝冠をうけ、皇帝権とドイツ王権を結合する神聖ローマ帝国の建国者となった。

2

【追加8】

福井大学

次の中世以降のキリスト教史に関する文章を読み、以下の設問に答えなさい。

- A ローマ教皇は、それまで庇護を受けていたビザンツ皇帝に政治的および軍事的に依存することができなくなった結果、フランク王国との関係を強めはじめた。こうして、教皇 **イ レオ3世** はフランク王のカルルにローマ皇帝冠を授けた。カルル大帝の登場は「西ローマ帝国の復興」といわれた。
- B 教皇グレゴリウス7世は世俗権力による聖職者の任命をも聖職の売買とみなした。これに対して、神聖ローマ帝国では、国内の司教や修道院長は世俗権力によって任命されるという慣習があった。こうして、神聖ローマ皇帝 **ロ ハインリヒ4世** と教皇が対立し、いわゆる叙任権闘争^①がはじまった。
- C ザクセン家のオットー1世は、支持基盤を諸侯から教会や修道院にかえ、これに特権を与え保護した。また、東方から遠征してきたアジア系の **ハ マジャール人** を撃退し、北イタリアに出兵して教皇を援助したため、962年に教皇からローマ皇帝の位を与えられた。
- D 東方のコンスタンティノープル教会では聖像破壊論が勢力を増し、ビザンツ皇帝 **ニ レオン3世** は聖像禁止令を発布した。もともとキリスト教は聖像を厳しく禁じていたが、西欧ではゲルマン人のキリスト教化に聖像は有効とみなされ、修道士たちはこれを重視して布教活動を行っていた。
- E 教皇ボニファティウス8世は、教皇権の優越を主張して、聖職者への課税を進める英仏と戦争をおこしたが、フランス王フィリップ4世にアナーニでとらえられ、解放後死亡した。1309年には、教皇庁が南フランスの **ホ アヴィニヨン** に移され、以後約70年間、教皇はフランス王の監視下に置かれることになった。このことを、教皇のバビロン捕囚^②という。
- F 教皇ウルバヌス2世はクレルモン宗教会議で聖地回復のための十字軍遠征を提案した。このとき、聖地エルサレムは **ヘ セルジューク朝** によって占領されていた。諸侯や騎士を中心に編成された 第1回十字軍^③ は、聖地の奪回に成功し、エルサレム王国を建国した。しかし、この王国は次第に勢力を失い、最終的に **ト マムルーク朝** の攻撃を受けて滅亡した。
- G ルターは、教皇レオ10世による贖宥状(免罪符)の乱売に対して、「九十五カ条の論題^④」を発表した。教皇はその取り消しを要求したが、ルターはこれを拒否し破門された。だが、彼は教皇や皇帝から自立しようとする諸侯や都市に熱狂的に支持された。こうしてルター派諸侯は、カトリックの擁護者を自認する神聖ローマ皇帝カルル5世に対してシュマルカルデン同盟を結成し、内戦をはじめた。最終的に、1555年の **チ アウクスブルクの和議** において諸侯の信仰は容認された。こうした一連の過程で、ローマ・カトリック教会の宗教的・政治的権威は激しく揺さぶられたのである^⑤。
- H 2005年4月の ヨハネ・パウロ2世^⑥ の死により、コンクラーヴェ(教皇選挙)が行われ、南ドイツ出身のベネディクト16世が選出された。

設問1 文中の **イ** から **チ** のそれぞれに当てはまる語句を答えなさい。

イ	ロ	ハ	ニ
ホ	ヘ	ト	チ

設問2 AからHの文章群を時期の早い順に並べかえると、次の(あ)から(え)のいずれの組み合わせになるか、記号

で答えなさい。

(あ) D→A→F→C→E→B→G→H

(い) D→A→C→B→F→E→G→H

(う) A→D→C→F→B→E→G→H

(え) A→D→F→C→E→B→G→H

[]

設問3 下線部①に関して:これ以後の教皇権と皇帝権の関係について、以下の語を用いて説明しなさい。

(100字以内) カノッサの屈辱, ヴォルムス協約, インノケンティウス3世

教皇グレゴリウス7世に皇帝ハインリヒ4世が謝罪するカノッサの屈辱は教皇権優越の契機となった。1122年のヴォルムス協約で皇帝は叙任権を失い、教皇権は13世紀のインノケンティウス3世のとき絶頂期に達した。

設問4 下線部②に関して:この結果、いわゆる「教会大分裂(大シスマ)」がおこる。捕囚後から大シスマまでの過程を説明したうえで、こうした一連の出来事が、その後、キリスト教全体にどのような影響を及ぼすことになるか、答えなさい。(150字以内)

捕囚後、仏王下のアヴィニョンの教皇とローマの教皇等の勢力に教会は分裂した。教皇の権威は完全に失墜し、教会の俗化や腐敗が進むとイギリスのウィクリフやベーメンのフス等が教会改革を唱えた。彼らを異端としたコンスタンツ公会議において大シスマは解消されたが、彼らの運動は近代初頭の宗教改革の先駆となった。

設問5 下線部③に関して:以後の派遣も含めて、十字軍の歴史的意義および問題点を述べなさい。

(100字以内)

東方貿易が盛んになり、ヴェネツィアなどの都市が繁栄し、またイスラームやビザンツの学問・文化が西ヨーロッパにもたらされた。一方、教皇の権威は失墜し、諸侯や騎士が没落して、国王の権力が伸長していった。

設問6 下線部④に関して:その内容に表れるルターの信仰の特色を述べなさい。(50字以内)

魂の救いはキリストの福音を信ずることのみとし、善行や金銭では救われぬとする信仰義認説をとった。

設問7 下線部⑤に関して:そのローマ・カトリック教会の側は、1545～63年にかけてトリエント公会議を開催し、教皇の至上権と教義を再確認し、態勢の立て直しを図った。こうして開始されたローマ・カトリック教会を中心とした一連の改革を何というか、書きなさい。[対抗(反)宗教改革]

設問8 下線部⑥に関して:ヨハネ・パウロ2世は史上初のスラヴ系の教皇であった。その出身国を書きなさい。

[ポーランド]

一橋論述特訓追加問題(前期②)

【追加9】 京都府立大

12世紀に至る聖職叙任権闘争について論述せよ。なお、論述するにあたっては、下の語句をすべて使用し、使用した箇所には下線を引いておくこと。1122年 カノッサ クリュニー 妻帯 ハインリヒ4世

カロリング朝以降、皇帝や国王が聖職叙任権、すなわち大司教、司教、修道院長などを任命する権利を持っており、とくに神聖ローマ皇帝は、これに基づいて統治の支柱とした。しかし、皇帝たちの都合によって聖職者にふさわしくない人物が任命されるなど弊害も多かった。これに対して10世紀以降にクリュニー修道院などで戒律の遵守を徹底させる改革が始まると、これは教会全体の改革へと発展した。教皇グレゴリウス7世は聖職売買や妻帯を禁止し、改革を進めることで教皇権の拡大をはかった。さらに教会の腐敗の原因が皇帝や国王など俗人による聖職者の叙任であるとして禁止した。この決定は帝国の統治を揺るがすものであったため、当時の皇帝ハインリヒ4世との間で叙任権闘争を引き起こした。教皇が皇帝を破門すると、ドイツ諸侯の離反が起きたため、ハインリヒは1077年カノッサで教皇に謝罪した。この闘争は1122年にヴォルムス協約で妥協が図られ、カトリック圏の全ての聖職叙任権は教皇にあるとされた。こうして教皇首位権が確立した。

【追加10】 筑波大

次の問について、400字以内で解答しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

中世ヨーロッパにおける教皇権の拡大と衰退について、以下の語句を用いて説明しなさい。

アナーニ事件 インノケンティウス3世 教会大分裂 コンスタンツ公会議 叙任権闘争

11世紀のローマ教皇グレゴリウス7世は、一連の教会改革のなかで、世俗君主による聖職者の叙任を禁止し、神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世との叙任権闘争を引き起こした。教皇は皇帝に対して破門を宣告し、権力の低下を恐れた皇帝は「カノッサの屈辱」と呼ばれる謝罪を強いられた。こうした破門を手段として拡大した教皇権は、13世紀のインノケンティウス3世の時代に絶頂を迎えたが、十字軍遠征の失敗や各国の国王権力の拡大などの結果、教皇の権威にかげりが生じた。1303年には、フランス国王フィリップ4世が、対立する教皇ボニファティウス8世を監禁するアナーニ事件が起こり、教皇権は世俗君主による介入を受けるようになった。14世紀後半には、ローマとアヴィニヨンに複数の教皇が並び立つ教会大分裂が生じ、15世紀初めに神聖ローマ皇帝の提唱によって開かれたコンスタンツ公会議で事態が收拾されたが、教皇権の衰退は決定的となった。

【追加11】

北海道大学

次の文章を読み、問いに答えなさい。

ヨーロッパの中世から近世にかけて、森林と人間との関係には緊張がはさまれていた。森林は制圧すべき「敵」であるだけでなく、農民にとっては薪やドングリなど燃料・飼料の供給源でもあった。

11世紀後半から13世紀前半にかけて、森や荒地の開墾とともに、定住化と⁽¹⁾新たな農法の導入が進み、いわゆる「大開墾時代」を迎える。こうした⁽²⁾開墾運動が最高潮にあったときに、乱伐への懸念から森林保護条例が制定されはじめた。

問2 下線部(1)について、(ア)この農法の名称を答えなさい。また(イ)その内容を簡潔に説明しなさい。

[三圃制]

[耕地を春耕地・秋耕地・休耕地に分割して、3年で一巡する農地利用システムであり、これによって農業生産力が飛躍的に上昇した。]

問3 下線部(2)について、東方植民を例として、この開墾運動の特徴を簡潔に説明しなさい。

[エルベ川以東スラブ人居住地への東方植民では、当初は修道会、13世紀以降はドイツ騎士団が中心となり、ポーランド大公の特許状を得て広大な土地を占有した。]

4

【追加12】

名古屋大

16世紀初頭から18世紀半ばまでのスペイン・フランス・オーストリアの三国をめぐる動向について、300字以内で論述せよ。ハプスブルク家・ブルボン家・カルロス1世・ルイ14世・三十年戦争・ユトレヒト条約・外交革命

16世紀初めハプスブルク家のスペインはカルロス1世が神聖ローマ皇帝を兼任して強大化したが、オランダの独立、アルマダ戦争の敗北により同世紀末以降衰退した。代わってフランスのブルボン家が、17世紀前半台頭して三十年戦争に介入し、ハプスブルク家に対抗、同世紀後半ルイ14世は国際政治の主導権を握った。18世紀初めのスペイン継承戦争後のユトレヒト条約で、ブルボン家がスペイン王位を継承したが、両国の合併は阻止された。一方同世紀半ば、オーストリア継承戦争に敗れたオーストリアのハプスブルク家は、プロイセンへの対抗上、外交革命によりフランスと提携して七年戦争に臨んだ。ここに国際政治上の両家の対立は終わった

【追加13】

横浜国大

16世紀から17世紀前半までのヨーロッパの国際情勢を念頭に置いて、三十年戦争の歴史的意義を300字以内で説明せよ。

三十年戦争は1648年のウェストファリア条約で終結した。スウェーデンとフランスが領土を拡大し、スイスとオランダの独立が国際的に承認された。アウグスブルクの和議の再確認が行われ、領主に宗教の選択権が与えられ、カルヴァン派も公認されたが、個人の信仰は依然として認められなかった。また、ドイツでは神聖ローマ帝国が名目化し、領邦分立と戦争の荒廃により、近代化が遅れたが、領土を拡大したプロイセン公国が台頭した。そしてブルボン朝とハプスブルク朝の2大勢力の抗争を中心に、ユトレヒト条約に至るヨーロッパの国際関係の大枠が確定した。また、カトリック教会は政教分離を強め、近代的教会へ転換した

【追加14】

一橋大

ドイツを舞台とする三十年戦争はドイツに政治的利害と領土的野心を持つフランスとスウェーデンなどの介入を招き、多数のヨーロッパ諸国が関与する戦争となった。また、その講和会議はヨーロッパ最初の国際会議とされる。以上のような点に留意しながらドイツ三十年戦争の結果と、それが後のドイツに及ぼした影響について述べなさい。

(400字以内)

三十年戦争は1648年のウェストファリア条約により終結した。この条約により、ドイツではカトリック、ルター派、カルヴァン派の信仰が認められ、諸領邦の主権が再確認され、神聖ローマ帝国は有名無実の存在となった。戦乱により国土は荒廃し、人口も激減し、近代化が大きく立ち遅れたが、戦災の比較的少なかったブランデンブルクプロイセンは、領土を大きく拡大し、オーストリアに次ぐ強国へ発展した。また、フランスはアルザスとライン左岸、スウェーデンは西ポメラニアを獲得し、オランダとスイスは独立を承認された。三十年戦争までのヨーロッパの国際関係は、オーストリア・スペインを支配するハプスブルク家と、反ハプスブルク連合の対立の形をとってきた。しかし、交戦国以外の諸国も参加したウェストファリア条約で、ハプスブルク家の勢力が大幅に後退すると、列国は以後、独立した主権国家として対等の立場で近代的外交を展開した。

【追加15】

京都府立大

ドイツの三十年戦争とその影響について、200字以内で論述せよ。なお、論述するにあたっては、下記の語句をすべて使用し、使用した箇所には下線を引いておくこと。句読点やカッコ、数字は、それぞれ1字として数える。

17世紀の危機 ウェストファリア グスタフ＝アドルフ 主権 スイス

(解答例1) 「17世紀の危機」と呼ばれるヨーロッパの社会・政治・経済的危機は、各地の反乱や革命として現れたが、その一つが**ペーメンの新教徒反乱**に端を発するドイツの三十年戦争である。スウェーデン王**グスタフ＝アドルフ**やフランスなど外国軍も参加して国際戦争に発展するが、ウェストファリア条約で終結した。この結果、スイスやオランダの独立が承認され、ドイツの領邦に**主権**が認められ、ヨーロッパの主権国家体制が確立した。

(解答例2) ヨーロッパで「17世紀の危機」といわれる現象の最大のものが三十年戦争であった。ペーメンの新教徒反乱で始まったこの宗教戦争は、スウェーデン王**グスタフ＝アドルフ**やフランスの介入によって国際戦争に発展した。戦争はウェストファリア条約で終結し、**カルヴァン派の公認**のほか、オランダとスイスの独立も正式に承認された。ドイツの領邦は**主権**が認められ、神聖ローマ帝国は有名無実化し、ヨーロッパの主権国家体制が確立した。

【追加16】

防衛大学校

つぎの文章を読み、以下の設問に答えよ。

A.

中世以来ヨーロッパ随一の名家であるハプスブルク家は、10世紀に西南ドイツに起こった貴族で、その名はスイスに築いた城が**ハビヒスブルク**(「鷹の城」とよばれたことに由来する。ア**大空位時代**の混乱の後、始祖ルドルフ1世が神聖ローマ帝国皇帝に選出され、オーストリア公国を獲得するなど、ハプスブルク家興隆の基礎を固めた。14世紀に、ハプスブルク家は西方では**イスイス独立戦争**に敗れて家領の拡大に失敗したが、東方では家領を拡大した。ルドルフ4世は**ルクセンブルク家の皇帝カール4世**の金印勅書に対抗して大特許状を偽造してまで領邦君主としての特権を主張し、自ら大公と称した。15世紀前半以降、ハプスブルク家は皇帝位を事実上独占するようになった。マクシミリアン1世は1477年ブルゴーニュ公国の継嗣マリーとの結婚によりブルゴーニュ公領を併せ、その子フィリップをスペイン王女と結婚させ、孫の**スペイン王カルロス1世**が神聖ローマ帝国皇帝カール5世となったとき、スペイン王国との結合によるハプスブルク世界帝国が実現した。さらに東方に対してもカール5世の弟フェルディナントをボヘミア・ハンガリー王女と婚約させている。こうした結婚政策はフランスとの対立を激化させ、フランスと組んだトルコのヨーロッパ遠征を招いた。オ1526年**ボヘミア・ハンガリー王ラオヨシュ2世**が戦死し、フェルディナントはボヘミア・ハンガリーの王位を継承することになった。皇帝カール5世は宗教改革による教会と帝国の分裂のなかで、長期にわたるフランスとの戦争とウィーンを包囲したトルコの圧力のために諸侯と妥協せざるを得ず、1555年**アウクスブルクの宗教和議**を結んだ後、翌年スペイン、ネーデルラント、イタリアの家領を息子のフェリペ2世に、ドイツの家領と皇帝位をフェルディナント1世に譲って退位した。ここにハプスブルク家はオーストリア系とスペイン系に分かれた。スペインはフェリペ2世のもとでポルトガルをも併

合し最盛期を迎えたが、フランス、イギリス、オランダと敵対し、衰退の兆しも現れた。オーストリア系でも相続争いと宗教争乱が続き、1618年からは三十年戦争が始まった。1648年に結ばれたこの戦争の講和条約ウェストファリア条約は戦禍による荒廃とともにドイツの近代化を著しく遅らせることとなった。皇帝レオポルト1世は、1683年再びウィーンを包囲したトルコ軍を撃退、ハンガリーの大部分を獲得し、オーストリアは東欧における覇権を確立した。スペイン系がカルロス2世で絶えると、新王にフランスのルイ14世の孫フェリペ5世が即位し、スペイン継承戦争が勃発した。1713年ユトレヒト条約で列国はフェリペ5世を承認し、スペイン王位はブルボン家に移った。しかしオーストリアはネーデルラントとイタリアの旧スペイン領を併せた。皇帝カール6世はこの広大な領土の永久不分割と長子相続制を定めたが、相続者に男子を欠き、長女マリア＝テレジアの一括相続のために譲歩を重ね、国際的な承認を得ていた。しかしカール6世が亡くなるとオーストリア継承戦争が始まり、1748年の(シ)でオーストリアはシュレジエン、パルマ、ロンバルディアを失ったが、マリア＝テレジアの家督相続は承認された。戦後は軍・行財政改革を進め、外交でも長年敵対関係にあったフランスとの同盟を成功させプロイセンの孤立を図り、七年戦争ではロシアとともに(ス)を苦しめたが、シュレジエンを奪回することはできなかった。1780年まで母マリア＝テレジアと共同統治してきた皇帝(ソ)は、それ以後「革命的」といわれるほど矢継ぎ早に改革を推し進めたが、宮廷内の保守派の抵抗や領内異民族の反乱で失敗に終わった。1806年、ナポレオン戦争の中で神聖ローマ帝国は解体し、最後の神聖ローマ帝国皇帝フランツ2世はオーストリア皇帝として、ウィーン会議後の反動体制の頂点に立った。1848年の三月革命は王家を動揺させたが、その年フランツ・ヨーゼフ1世は反革命を担う若き指導者として即位し、反革命を勝利に導いた。しかし彼は、ブルジョアジーの台頭と諸民族のナショナリズムの高揚のなかで、反動的な官僚主義と啓蒙的な君主思想の間で悩み続け、1859年のイタリア独立戦争と1866年の普墺戦争で敗れると、政策も中央集権化と諸民族の連邦化の間で揺れ動いた。1867年「アウスグライヒ」によってオーストリア＝ハンガリー二重帝国が成立したが、スラヴ系民族などには大きな不満を残した。1878年のベルリン会議後のドイツ・オーストリア二国同盟は、ロシアとの関係を悪化させスラヴ系民族をロシアに近づけ、西欧列強からも孤立して、ドイツへの従属を深めさせた。オーストリアは、民族運動と帝国主義の交錯するバルカン問題の泥沼にはまり込み、1914年サラエヴォにおける皇位継承者夫妻の暗殺につながった。これがきっかけで始まった第一次大戦のなかフランツ・ヨーゼフ1世は長い生涯を終え、最後のオーストリア皇帝カール1世は敗戦による帝国の崩壊とともに退位し、ハプスブルク王家の歴史も幕を閉じた。

設問1 下線アはどのくらいの期間続いたのか次のなかから選んで記号で答えよ。

- a. 約10年 b. **約20年** c. 約35年 d. 約50年
e. 約75年 f. 約100年 g. 約120年 h. 約150年

設問2 下線イのスイス独立にまつわる伝説で活躍する人物の名を答えよ。 **ヴィルヘルム＝テル**

設問3 下線ウの皇帝は教皇のローマ帰還に尽力して実現させたが、教皇はどこから帰還したのか、地名を答えよ。

アヴィニオン

設問4 下線エの祖母によってイベリア半島にあった最後のイスラム王朝は滅ぼされたが、その都の宮殿の名を答えよ。**アルハンブラ宮殿**

設問5 下線オの戦いの名を答えよ。**モハーチの戦い**

設問6 下線カのと議の「支配者の宗教がその領内に行われる」との原則によって確立され、諸侯が最高の司教として領内の教会の保護支配権を掌握する制度をなんと呼ぶのか答えよ。**領邦教会制**

設問7 下線キの原因が起こった地域名を答えよ。**ベーメン**

設問8 下線クについて、その理由を簡単に述べよ。

ドイツの諸侯にほとんど完全な主権が承認されたため、帝国における諸侯の分立状態は決定的となった。

設問9 下線ケについて、この条約名を答えよ。**カルロヴィッツ条約**

設問10 下線コについて、どのような条件でフェリペ5世を承認したのか、答えよ。

フランスとスペインが合同しないという条件

設問11 下線サについて、この条約名を答えよ。**ラシュタット条約**

設問12 (シ)に当てはまる条約名を答えよ。**アーヘンの和約**

設問13 (ス)に当てはまる人名を答えよ。**フリードリヒ2世**

設問14 下線セのシュレジエンは、a)どのような重要性を持つ地域なのか答えよ。b)現在は主にどこの国に属しているのか、国名を答えよ。a) **工業と鉱業が盛んな地域** b) **ポーランド**

設問15 (ソ)に当てはまる人名を答えよ。**ヨーゼフ2世**

設問16 下線タについて、帝国の解体につながった戦いの名を答えよ。

アウステルリッツの戦い [三帝会戦]

設問17 下線チについて、この会議で議長を務め、19世紀前半のヨーロッパの反動政治を推進した人物の名を答えよ。**メッテルニヒ**

設問18 下線ツについて、オーストリアがこの戦争で負けたことによって解体したドイツの国家組織の名称を答えよ。**ドイツ連邦**

設問19 下線テについて、「アウスグライヒ」とはオーストリアとハンガリーとの間で締結された協定名であるが、どのような意味なのか答えなさい。**妥協**

B.

ブルボン家は、フランス中部のブルボネ地方の古い領主の家系であった。13世紀後半に、この地の城主の娘とフランス王ルイ9世の子との結婚がブルボン家の起点となり、その子がブルボン公家を創立した。その後ブルボン公位は分家に移り、16世紀中頃、当主アントアヌ・ド・ブルボンはナバラ女王との結婚によりナバラ王を兼ねた。

その子アンリは宗教戦争の渦中に成長したが、(トヴァロワ)家の断絶により、ブルボン家が(ナカパー)朝の傍系であるところから王位の正統相続者の資格を得、1589年アンリ4世として即位した。ここにブルボン家はフランスの王家となった。アンリ4世は自らカトリックに改宗すると共に(ニナントの勅令)により宗教戦争に終止符を打ち、王国の統一を回復し、王朝の基礎を築いた。続くルイ13世の時代からルイ14世の親政開始までの時期は絶対王政の確立期にあたり、国内が不安定で貴族や地方民衆の反乱が続くなか、中央集権化が推し進められた。ルイ14世の幼少期には一時は王権も危ないほどの反乱が起こったが、鎮圧後の親政時代によりやがてブルボン王朝の全盛時代を迎えた。有能な側近に支えられた親政は、国内ではよく整備された官僚制度を通じて中央集権化を推し進め、対外的には重商主義と一連の侵略戦争を展開した。フランスは国際的にはヨーロッパ第一の強国にのしあがり、国内では太陽王ルイ14世を中心にヴェルサイユ宮殿で華やかな宮廷生活が展開し、文化的にも古典主義の文芸やバロック美術がいっせいに花開いた。しかしルイ14世没後、絶対王政の動揺は急速に表面化した。名門貴族は貴族制的政体の復古をめざし、ブルジョワ階級の側からも批判が啓蒙思想として現れた。このような状況に直面した国王政府は、国家機構の近代化を図ることで危機を乗り切ろうとした。改革はルイ15世の時代に着手され、次のルイ16世の時代にも財務総監らによって試みられたが、特権身分の反対にあって失敗した。ルイ15世の時代から生じていた、財政危機も、アメリカ独立戦争の負担が加わり、さらに深刻化し、王政は破局を迎えた。1792年、フランス革命下の8月10日事件で王権は停止され、9月王政は廃止された。

1814年、ナポレオン帝政が崩壊した後、反革命体制であるウィーン体制の一翼を担うものとしてブルボン王家の復位が図られ、ルイ16世の次弟ルイ18世がフランス国王となった。ルイ18世は反動の行き過ぎを極力抑えながら、大土地所有者と上層ブルジョアという二つの社会勢力の和解をは

かったが、次のルイ 16 世の末弟(フ)の治世になると、相次いで反動的な政治が進められるようになった。これに対して、反政府派の自由主義者たちは、1830 年7月、パリ民衆の蜂起に乗じて政権を掌握、この七月革命によりブルボン朝は消滅した。

設問 20 (ト)に当てはまる語を答えよ。

設問 21 (ナ)に当てはまる語を答えよ。

設問 22 (ニ)に当てはまる語を答えよ。

設問 23 下線又について、この時期に活躍し、「新教徒を壊滅し、大貴族の誇りを打破し、すべての人民をしてその義務に服させ、国王の名を、その当然の地位にまで諸国民の間で高めることに全精力を集中すること」を国王に約束した宰相の名を答えよ。**リシュリユー**

設問 24 下線ネの反乱を刺激した国外の出来事とは何か答えよ。**清教徒革命 [ピューリタン革命]**

設問 25 下線ノについて、この時期の文芸で中心をなしたジャンルを答えよ。 **宮廷劇**

設問 26 下線ハについて、フランスがアメリカ独立戦争に参戦したときの財務総監の名を答えよ。**ネッケル**

設問 27 下線ヒについて、フランス以外でブルボン朝が復位した国を二つ答えよ。**スペイン、ナポリ**

設問 28 (フ)に当てはまる人名を答えよ。 **シャルル 10 世**

6

【追加17】

千葉大学

以下の語句を用い、ヨーロッパ絶対主義について国家形態と経済政策の関連性に留意しつつ論じなさい。なお、語句には最初に用いたときに下線を付すこと。(400 字)

官僚

常備軍

重商主義

重金主義

貿易差額主義

絶対主義とは、16～18 世紀の封建社会から近代市民社会への過度期に生まれた強力な君主政治に基づく初期の主権国家形態である。封建貴族の力が衰えるにつれて、国王は王権神授説でその地位を強化し、台頭してきた市民階級の支持を受けながら、**官僚**機構を通じて行政・司法を握る一方、租税制度に裏付けられた国王直属の**常備軍**を組織し、国民の直接支配を強めた。そして官僚と常備軍の維持には多額の財源が必要なため、国家が積極的に経済活動に介入する**重商主義**政策がとられた。これは初期においては海外からの貴金属獲得という**重金主義**であったが、後に国王が一部の特権商人に独占権を与え、輸出を振興する**貿易差額主義**をとることによって、経済の国家統制及び、自らの権力基盤強化を図るようになった。

【追加18】

東京学芸大

ピョートル1世についてシベリア出兵のほかにこの時期のロシアの対外関係はどのようなものであり、どのような意義をもったか。100 字以内で記せ。

1700～21 年ロシアはポーランド・デンマークと組んでスウェーデンとの北方戦争に勝利してバルト海に進出し、サンクト=ペテルブルクを建設して首都とした。またトルコを圧迫してアゾフ海にも進出した。

【追加19】

京大

16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパの諸国家は、重商主義政策をとって自国の商工業を保護・育成しようとした。この重商主義政策はイギリスとフランスにおいてどのような形で行われたか。具体的な事実を挙げて、200 字以内で論述せよ。

イギリスはエリザベス 1 世の治世に、毛織物工業の育成や東インド会社によるアジア貿易の拡大を図った。また、クロムウェル時代に航海法でオランダの中継貿易に打撃を与えつつ、革命後も重商主義を継続した。フランスは、ルイ 14 世のもとで財務長官コルベールが東インド会社再建や王立マニファクチュア設立を進め、イギリスと同様に産業保護主義で重商主義を進めた。また、北米、インドでイギリスと植民地抗争を行った。

【追加20】

一橋大

歴史的に「ネーデルラント」と呼ばれた地域は、14世紀から19世紀前半にかけて、どのような歴史的経過をたどってきたであろうか。「ネーデルラント」を構成する各地域の宗教的特色や政治権力の移り変わりに留意しながら、この点について説明しなさい。その際、以下の語をすべて文中に用い、それらを最初に使用したところでは下線を引きなさい。(400字)

七月革命 百年戦争 ウィーン会議 ユトレヒト同盟 ウェストファリア条約

ネーデルラント南部のフランドル地方は毛織物業が盛んで、羊毛をイギリスから輸入していた。そこをフランス国王が支配しようとしたことが百年戦争の一因となった。ネーデルラントは14世紀末にはブルゴーニュ公国の領土となり、翌世紀末ハプスブルク家の所領となる。スペイン国王を兼ねた皇帝カール5世の退位後にスペイン領となったが、フェリペ2世のカトリック政策などに反抗してオランダ独立戦争が始まった。カトリックの多い南部10州は脱落したが、カルヴァン派の多い北部7州はユトレヒト同盟を結成して1581年にオランダの独立を宣言して、1648年のウェストファリア条約で国際的に承認された。南部はスペイン継承戦争後の18世紀初めにはオーストリア領となる。オランダはナポレオンに併合されたが、ウィーン会議で独立を回復して立憲王国となり南部を併合した。南部も七月革命の影響下、オランダから独立を勝ち取り1831年に立憲制のベルギー王国となった。

1477年にネーデルラントがハプスブルク家の所領となったのは、ハプスブルク家のマクシミリアン1世とブルゴーニュ公女マリアとの結婚による。オランダ独立後もスペイン領だった南部は、スペイン継承戦争の最終講和条約(ラシュタット条約=1714)でオーストリアに割譲された。